

30. ~~30~~

プリントアウトした請求票は、所蔵部署階のカウンターにお持ちください

2011年01月06日 11:39:30

2011年01月06日 11:39:30

入館証番号:

[Empty box for library card number]

入館証番号:

[Empty box for library card number]

Call Slip

<請求票>

Call Slip

2154
3025
39

<請求票> (控)

資料名 : 現代支那人の見たる赤穂四十七義士

巻次 :

著者名 : 朱華 // 著

出版者 : 中央義士会 頁数 : 40p

大きさ : 19cm 出版年 : 1939.12

書名
資料名 : 現代支那人の見たる赤穂四十七義士
巻次 :
著者名 : 朱華 // 著
出版者 : 中央義士会
出版年 : 1939.12
大きさ : 19cm
頁数 : 40p

切り取り

所蔵館 : 中央
所蔵部署 : 1階資料お渡し・返却カウンタ

所蔵館 : 中央
所蔵部署 : 1階資料お渡し・返却カウンター
配置場所 : 1/66A 中)B1書庫A
資料ID : 1128184194

配置場所 : 1/66A 中)B1書庫A
資料ID : 1128184194

請求記号
2154
3025
39

— 社 人 自 東 新	力	事
↓	請求	報告
— 社 人 自 東 新		
MB1 マイク B1 アルファベット 原紙 縮刷		
MB2 マイク B2 洋 中 朝		
行 1F B1 B2		
多 児 青 1F B1 B2		

序 1~5.
本文 1~3
33~37

序

今や皇紀二千六百年を迎へんとして、皇威八紘に輝く國家的盛典を仰ぐことは、國民の齊しく慶賀し奉るところである。

恰もよし、明年春は、赤穂義擧の事ありてより二百四十年、本會が義士精神を傳へて社會風教に志してより二十五年の意義ある歳を迎へんとすることは、深く感慨に堪へない。

しかも支那事變處理に邁進しつゝある秋に當つて、日本精神の眞髓として、義士精神が新しく支那人、西洋人に至大の感銘を興へつゝあることば、中山博士の推獎さるゝ朱華氏の快著によつて明かであつて、本會の微衷の表はれとして、本望の至りである。

本會が、二千六百年奉祝記念事業の一として、本冊子を刊行するに際し、一言雜辭を述ぶる次第である。

昭和十四年十二月

財団法人中央義士會

理事長 龜岡 豊 二

序

今ここに翻刻し且つ和譯するものは「赤穂四十七義士」と題し、吾那民國人朱華君の著述にして、『新民週刊』第二十七期（中華民國二十八年六月出版）以下第三十期（同年七月出版）の四『週刊』に掲載せられたる者なり。朱華君は北京の新民學院の講師にして、本年三月我が鐵道省國際觀光局招待によりて我日本國に來濟し、一週×月の漫遊を爲せり。其間山清水秀の風景を愛し、隨筆若干篇を作り。此一篇も即ち朱君の所謂『隨筆』の一なれども、隨筆の名によりて構想せらるゝが如き漫筆雜談にあらざして、赤穂四十七士の忠義に感ずること甚だ深く、我國の國民精神、武士道及び大和魂の思想と其實行に就いても、理解し感悟する所淺からず。特に赤穂義士の義舉に對しては、滿腔の感激を崇敬を表し、義士の壯烈なる自盡の事を記しては、感激の極、我書至此、我心片々碎矣、と言ふに至れり。朱氏の記事、一二重複の處あり、人或は之を尤めん。されども、予は之を尤めんより、寧ろ熱心の極、感激の極、同事を直記重複するに至りしものなりと思ふなり。

あ、義士忠烈の行、異國の人をも感動せしむること斯の如く深きもの、決して偶然にあらざるなり。亦徳義士に就いては、江戸時代の支那人をして感動せしめて、我邦の院本を漢譯して、『海外奇談』(當時の乾隆五十九年即寛政六年、西紀一七九四年)序文、文政八年本邦翻點刻削と爲したるあり、現代に至りては歐米諸國の人、亦亦徳義士の事を歐文に或は著述し、或は憧憬追慕して、誠意を表するものあり。而して今又朱氏の此著述あり。義士の世界的風貌に關する者又大なりといふべし。

今や日・滿・支三國文化提携論議に行はれ、之に關する意見、方策、宣傳及び實施も亦着々行はれつつあり。眞に三國の爲め、東亞新秩序の爲めに費すべきことなり。而して文化提携の爲めには、國際士人間の共鳴同感、または更に進みて一心一徳の精神的基礎あることを要す。その事固より容易の業にあらずと雖も、義士の忠烈が我が國人をして深く感動せしむるとともに、彼國の人をして又深く同感せしむるが如きは、後發兩國士人の心と心とを固く結ばしむるものとして注意すべく、文化提携の爲めに裨益する所決して鮮少なざるを確信す。果して然らば、朱氏の此『隨筆』亦時局に貢獻する所小にあらず、從つて之を翻刻し且つ和譯して世に公にせんとするも、亦無益の事にあらざるなり。

朱氏の記事中、中央義士會に言及するもの、一再のみにあらず。乃ち同會理事長龜岡豐二君に談る

に、本書出版の事を以てす。たゞ中央義士會は十二月十四日に舉行せんとする義士祭について、考慮しつつあり。龜岡氏直に之を快諾す。本書の刊行を得たるは龜岡氏の義を見て直に行はんとする好意によるものなり。一言して以て感謝の意を表す。

皇紀二千六百年前一年

昭和十四年十一月二十一日

東京文理科大學教授 中山久四郎
學 博 士

赤穂四十七義士 (東遊隨筆之一)

朱

華

東遊隨筆序

山水の清、人盡く之を樂しむ。一月の遊、往々十年の書を讀むに勝る。予、幼より壯遊をなすことを喜
び、足跡大江「揚子江」の南北を遍歴す。己卯「民國二十八年、即ち昭和十四年」暮春三月、甚長し驚
飛び、百花盛に開く。日本鐵道省國際觀光局の邀をうけ、「日出之國」に真渡し、四月の江邊遊をなす。
日本、山陽に水秀で、景緻江南に髣髴たり。
惜むらくは予、喜く文を屬せず、よく紀遊の作を爲さざること。此行、見聞及び所、參するに典籍を以
てし、隨筆若干篇を成す。一篇一題、或は記事、或は抒感、筆の至る所にまかす。故に名けて隨筆と
いふと云ふ。

第一章

日本は武士道を以て國を立つ。武士は死を惜まず。常に身を殺して以て仁を成し、生を捨て、以て義を取り、其人と爲り、其行事、富貴の淫する所とならず、貧賤の移す所と爲らず、威武の屈する所と爲らず。義の在る所、一己を犠牲にして以て赴く。赴湯蹈火、粉身碎骨といへども、亦辭せざる所なり。蓋し其心身合一、死生を超越し、無我の境に入り、精神的修養より得ること深し。

武士既に一死を惜まず。又其主に忠にして、主辱めらるれば臣死す、古訓昭垂す。武士其主の爲に『仇討』を實行する者、史書を絶たず。尤も赤穂四十七義士を以て徳川時代武士の花とす。其仇討の擧、精忠義烈、壯心は山河を呑み、浩氣は日月を貫き、史冊に輝映し、宇宙を掌握す。我其人を書し、我其忠に服す。青山延光は、

以此鼓盪正氣。震駭天下。若霹靂下擊。而嶺崖摧破。若洪濤鼓怒。而山嶽搖動。英風勁氣。激頑立懦。

といひ、藤田彪(東湖)は則ちその『成仁取義。俯仰無愧天地。』を稱す。我も亦然か。いふ。赤穂四

十七義士の首を大石良雄といふ。播磨赤穂の人、良雄年十五、祖祿をつぎ、内藏助と稱し、采女正長女及び内匠頭長矩につかへて、國老となる。性寛裕沈毅、醜駝目用をなさず。時の人能く識ることまれなり。長矩亦之を疏んず。要職に在りと雖ども、事に於て預かること鮮し。而かも良雄以て意に介せず。蹈睡露さず。人皆さして痴となす。元祿十四年(西紀一七〇二年)三月、幕府長矩に命じて様件せしむ。是の日、上野介吉良義典、長矩を城中に辱かしむ。長矩大に怒り、之を手刃す。俄に旁人の抱持する所となり、義典劊を被りて死せず。長矩大不敬に坐し、即日死を賜ふ。弟大學長廣、人を遣はし之を泉岳寺に葬る。幕府長廣に命じて私第に屏居せしめ、使を遣はして赤穂城邑を收む。時に良雄赤穂に在り、變を聞くの日、群臣を城中に會す。來會する者三百餘人。良雄衆に謂つて曰く、

主辱めらるれば臣死す。吾輩固より當に死すべし。顧ふに社稷滅ぶと雖ども、介弟大學君あり。當に死を以て幕府に譲り、先君の爲に嗣を立つべし。もし幕府許さずんば、則ち此城と俱に亡びんのみ。

と。用事の臣、大野九郎兵衛曰く、

不可なり。城に據つて以て請ふは、是れ上を要するなり。一たび頻名を得ば、先君を玷辱せん。將大之を祭

の必成を期し、卒に其の未竟の志を竟へ、卒に其の得て甘心せんと欲する所の者の首を擧げて、歸つて其先君を祭る。恨を飲むこと將に兩年ならんとす。一旦仇人首を授くれば、先君の靈、實に之を照鑒す。既に其心の安んずる所を行へば、自ら亦以て其先君に報ふべし。日本の俗歌にいふ、

君恩は重し。重きこと山の如し。臣命は輕く。輕きこと髮の如し。

と。赤穂四十七義士の『仇討』は、初めは實に崇徳報恩の一念と、かの君臣の大義を辱しめざるとに基き、所謂『主憂則臣辱。主辱則臣死。』主難を蒙むれば、則ち臣子たる者、又なんぞ能く命を君國に捨て、一死を以て之に報せざらんや。嗚呼、此を之れ忠臣義士と謂ふ、我聞然するなし。

日本の傳奇『假名手本忠臣蔵』之を稱して忠臣と曰ふ、宜べなり。幕新助傳真の『赤穂義人録』に至つては、首として其の稱を定めて義士といふ、亦宜べなり。

明治天皇登極の元年十一月五日、初めて東京に幸したまふ。嘗て使を遣はして泉岳寺に赴き、往いて赤穂義士の墓を吊はしめ、並に勅語を賜ふ。文にいふ、

汝良雄等、固く主従の義を執り、復仇して法に死す。百世の下、人をして感奮興起せしむ。朕深く嘉賞す。今東京に幸す。因つて使、權辨臺藤原猷を遣はし、汝等の墓を吊ひ、且つ金幣を賜ふ。

と。今日本に中央義士會あり。表彰の工作に従軍す。彼の國の人、男女老幼、赤穂四十七義士あるを知らざるなく、忠義の情、深く人心に入る。『忠臣蔵』開演の日は、士女城を傾けて往いて觀、一次として滿座ならざるはなし。其四十六人長眠の地は、墓碑叢立、爾來二百三十有餘年、香烟絶へず。歐米人士日本に到る者、亦多く所謂 Holy Grave Robbers あるを知りて、其墓を擲吊し、感慨無量、その甚しき者は、同情の涙を一掬す。此坂井華の詩に、

墳前滿地草蒼蒼。靈墓行人滿涕痕。

の句ある所以なり。人を感じしむるの深き、蓋し其情忠義烈、成仁取義、英風勁氣、萬古流芳、偶然に出づるに非ず、自ら其不朽なる者の在る有るを以てなり。

近者、日本中央義士會新に『元祿義擧之教訓』の一書を輯め、荒木貞夫、爲めに『義烈萬古』の四字を題す。因りて日本俗歌に憶及す。いふあり、『身は二世、名は千代。』と。赤穂四十七義士、身は死して名は死せず。千古史冊に輝映し、活氣壯志、將に永く天地の間に存せんとす。忠義の情、日本國民奉じて以て世の法とし、之を稱道して表ふることなし。

嗚呼、赤穂四十七義士の不死は、忠臣義士の不死のみ。其の不死の貴ぶべきは、亦其の忠臣義士た

るを貫ぶのみ。

赤穂義士の精神は、即ち是れ日本武士の精神なり。亦即ち是れ日本國民の精神なり。義士は死せり。而かも義士の精神は死せず、日本は武士道を以て國を立て、武士精神を以て其國民精神とす。而して赤穂四十七義士は、乃ち徳川時代武士の花にして、垂れて武士道の典型となるものなり。然らば則ち武士道は之を何と謂ふ。予去歲『東遊雜感』を作り、言ふ、

武士道なる者は、敬神崇祖、忠君愛國、武勇強毅、克己敦睦、信義質直、殺身成仁の謂なり。其終りや、身心合一、死生を超越して、無我の境に入る。義の所在には、一己を犠牲にして以て赴き、湯に赴き火を踏み、粉身碎骨すと雖ども、亦辭せざる所。武士道は即ち孟子言ふ所の大丈夫の道なり。亦即ち是れ臣子の道と國民の道たる也。武士道はおもひらく肉身は惜むに足らず。最も心の力を重視す。大高源吉、嘗て武士道の格言を作りて曰く、

桑の弓、岩をつらばくべし。蓋し精誠の至る所を以てすれば、以て一切を征服するに足る。故に武士道は、又是れ心の力の道なり。亦即ち是れ精神の力の道なり。

赤穂四十七義士、君あるを知つて身あるを知らず。たゞ心の安きを求めて、身の死を惜まず。鹽谷

時敏、作る所の『赤穂城壙觀大石氏故宅有感』の句にいふ、

一死祇應億萬生。君恩量我身輕。

と。大石良雄、變を聞くの日に當り、即ち死を以て幕府に請ひ、並に相與に城上に自殺し以て殉國を明にせんと欲す。是に於て刺血して盟をなす。故に其始めや、忠君愛國の情を以てし、以てその成仁取義の願を遂げんと欲し、得失利害、中に動くなく、必ず一死を求めて、以て其君に報ず。其繼ぐや、盤根錯節、此志變ぜず。隱忍機を待つこと一歳有餘。事を擧ぐるの日、大石良雄兵法を以て部下を勸し、皆業唯其命是れ従ふ。故に以て進退序あり、算遺策なく、必死の心を以て、必成の志を成すことを得たり。其終りや、仇人の首を以て、先君の墓を祭る。良雄其君の賜ひし所の匕首を出して、三たび仇人の首を撃つ。衆皆拜泣す。然して後僧に往きて自首し、四十六人同日に自盡す。切腹の時、従容自若たり。

嗚呼、君父の仇を復するは、大義なり。連名自首するは、國法あるを知るなり。幕府死を賜ふは、たましく以て其義を成すに足るなり。良雄遺言して長短の墓側に葬りしは、是れ死後猶英靈を以て其主を護らんと欲して也。かのその心境と、その行事を觀るに、一として武士道の精神に非ざるはなし。

その死を視ること歸するが如きに至りては、更に以て『大和魂』を發揚するに足る。

赤穂四十七義士の中、當時死を賜ひし者四十六人。寺坂信行は大石良雄の遺を以て預からず。寺坂信行既に歸るや、即ち仙石久尙に詣りて自陳し、衆と同罪なることを願ふ。幕府事過ぐるを以て問はず。故に赤穂四十七義士、亦之を四十六義士といふものあり。

佐藤樞、『赤穂四十七士傳』を跋していふ、

士の尚ぶ所の者は氣なり。我邦の俗、殊に氣節を重んず。忠臣孝子の國に死し仇を復する者、枚擧に暇あらず。赤穂四十七士。其人は則ち四十七。而して其心は則ち一なり。其愚吾を共にし、其生死を同じくす。

と。正にたゞそれ四十七人を以て一心とす。然して後始めて克く其志を成す。出だすに非常の學を以てすること霹靂の下撃の如く、洪濤の鼓怒の如し。而して之に當る者辟易す。試みに觀るに此四十七人中、堀部金丸、年最も長じ、春秋七十有六。大石良金、年最も幼なり。十五齡の童子のみ。大善の所在を以て、長幼父子、均しく能く同心戮力、並に『桑の弓、岩をつらぬくべし』の言を信じ、以て事必ず成るありとおもふ。其の仇人吉良の宅中に攻め入るの際に當りては、一鼓氣を示し、心の力を以て大なることくらぶるなし。四十七人の少數を以てすとはいへども、竟に吉良家人の衆と敵

となり、嗚喊擲殺、當る者披靡す。其十六人を死せしめ、其二十一人を傷け、最後に目つ仇人の首を斬獲し、並に其嗣子左兵衛を傷く。義士は一の死者なし。僅に四人略々微傷を受くるのみ。見るべし忠義の士、必ず大勇あり、『千萬人と雖ども、吾往かん』の氣概あることを。況んや、其の哀を心に含み、志は君父の仇に切なるをや。直べなり其哀しむ者は必ず勝ち、怒る者は必ず勇あるは。

嗚呼、赤穂四十七士は、皆忠臣義士なり。皆日本武士の典型なり。身は死して名は死せず。其精神亦常に天地の間に存し、天地ともに其不朽を同じくせん。我此文を撰し、我其人を敬す。下に阪井百太郎の詩を録し以て綯をなす。並に筆を擲ち合學して以て意を示す。阪井百太郎の詩にいふ、

若使無此事。臣節何由立。

若常有此事。終將無王法。

王法不可廢。臣節不可已。

茫茫天地間。

若事獨許赤穂士。

六月二十四日草草。